



がんばって小石をさがすねずみ

慶応義塾幼稚舎二年 小野史晃

あの時のアレクサンダは、がんばりました。なりたい自分になれる小石を、どんなにくるしくたって、さがしました。

ぼくにはそれがわかります。一年生の時、サッカーが下手で、「下手だから入れてあげられないよ」と言われて一人ぼっちになり、それがいやで、サッカーのれんしゅうをがんばったからです。

たいしたわけもなくホウキでおわれて一人ぼっちになったアレクサンダ。それとはぎゃくに、人からあいされるウイリー。アレクサンダは、ウイリーにあこがれて、あんなふうになりたくて、力いっぱいがんばったのです。

でも、ハプニングがおきました。あこがれのウイリーが、古くなってすてられてしまったのです。アレクサンダは、がんばった見かえりとして人にあいされるねずみになるというゆめをかなえるかわりに、小石をつかってしにかけたウイリーをたすけてあげました。

自分のゆめをぎせいにして友だちをたすけるなんて、なんてよいことをしたんだろう。でも、アレクサンダが、古びたぜんまいねずみのウイリーをたすけるためにしたことは、ウイリーを生きたねずみにすることでした。人にきらわれる自分と同じにしたのです。

アレクサンダは、なぜ、人にあいされる新しいぜんまいねずみに、かえてあげなかったのでしょうか。「ぜんまいねずみにあこがれていたけれど、じつは生きたねずみのぼくのほうがしあわせなんじゃないか。」と考えたからでしょう。だとしたら、アレクサンダは、多分もう二どと、小石をさがすためにがんばろうとはしないはずです。がんばれば、アレクサンダもウイリーも、人にあいされるねずみになれるのに、もつたいないと思います。

もし、サッカーの上手い友だちが足に大けがをしたら、ぼくはかみさまにたのんで、歩けるようにしてもらっただけでなく、もとどおりのサッカーの上手い選手にしてもらいます。そして、ぼくも、その友だちみたいになれるように、力いっぱいがんばっていきたいです。